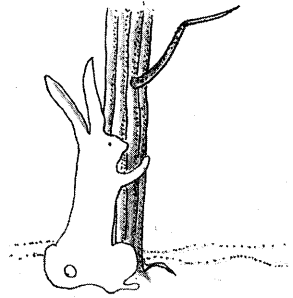


ハンカチ

松井 とし



「ルンルン、どうしてそんなに上を向いているの？」

学期末の慌ただしい日々をすごし、修了生を送り出してホッとした休日の午後、初めてうさぎの異変に気がついた。笑いながら近づいた私は、事の重大さに驚いた。苦しそうに上を向いて息をしている。

いつかは何かが起こる事を覚悟しつつ過ごしたこの半年余。夏休み前からおしっこに血が混じるようになり、秋に撮ったレントゲンは、彼女の体の中にできている「何か」を映し出していたのだった。わたしたちがルンルンにしてやれる事は、朝夕の葉と日々の散歩を欠かさず、日曜日もお正月も、彼女にとってより良き日をプレゼントすることだった。三学期になって血尿は出なくなり喜んだ。元気はあるし食欲も変わらず。わたしたちの

ティータイムには、前足をひざの上へのせ、ビケットをねだった。それなのに背骨が尾根のように目立ち始め、どンドンやせていった。

かかりつけのお医者さまは「もはや救命はできないが、できる限りの事をしよう」と言ってお下り、三日間注射に通った。顔を上にして抱いてやると少しは呼吸がしやすいのか、しきりに抱かれたがった。私の腕の中で、いつもと変わらぬ気高さを失わずにいるルンだった。が歯ぎしりをしている。苦しいのだろう。翌朝はいろいろな好物を差し出し、悲しそうに首を横に振るだけ。もう何も食べなくなっていた。

診察台の上のルンルンを、しゃがみこんだままじっと見つめていた先生は、「もう楽しんでやろう。この子のためだよ」と静かに言われた。涙をふきながら、でも私は即座にならずにいた。ルンルンが後足で立ち上がり抱きついてきた。

どの位の時がすぎたろうか。彼女が最後の眠りにつく迄の間、ただただぬれたハンカチを握りしめていた。安らかになったルンルンをつれて帰ると、朝からの冷たい雨が、ひと時雪に変わった。三月末の淡雪。それは、私たちの心に多くのものを残し、かの国に帰っていったルンルンのお別れのメッセージ。

(神奈川県立教育センター)